

# 三野町の若者定住事業

地理班 (徳島地理学会)

立岡 裕士\*<sup>1</sup> 石毛 一郎\*<sup>2</sup> 長野 昭夫\*<sup>2</sup>

## 1. はじめに

1990年の過疎地域活性化特別措置法制定を契機に、多くの市町村が若者定住事業に着手し、青年人口の流出を防ぎあるいは青年人口を大都市圏から還流させようとしてきた。徳島県でも幾つかの農山村において試みられている(図1)。若者定住事業において、自治体が住宅用地を造成して低価格で提供するという施策は決して珍しいものではないが、徳島県では概して西部の町で採用されている。これは、三野町が県内で最初にこの施策を実施し、一定程度の成功を収めたことに周辺の町が刺激され、この施策を採用するようになったためではなかろうか。本



図1 徳島県における若者定住事業

資料：徳島県ホームページ  
[http://www.pref.tokushima.jp/generaladmin.nsf/067cabf6e9cf037849256a180040eb88/60c9d8ea18799b2f492569f8000ecfba?OpenDocument&Highlight=0\\_022178442d0886nggg5dh10sj40885hgggamh10m6221aq80ghvn115fhj](http://www.pref.tokushima.jp/generaladmin.nsf/067cabf6e9cf037849256a180040eb88/60c9d8ea18799b2f492569f8000ecfba?OpenDocument&Highlight=0_022178442d0886nggg5dh10sj40885hgggamh10m6221aq80ghvn115fhj)

稿では、どのような人々がこの定住事業に応じたのかを調べることで、この事業が持つ意味について考える端緒としたい。

以下、第2章ではまず三野町の若者定住事業の概要についてまとめる。第3章では若者定住事業の背景であると同時にその結果でもある、三野町の人口および経済の動向を略述する。最後に第4章で若者定住事業に応募した世帯の実態についてまとめた。

## 2. 若者定住事業の概要<sup>1)</sup>

三野町の若者定住事業は「過疎化・高齢化に対する活性化対策として優良誘致企業による若者雇用促進等、若者定住化を図るため、安価で整備の整った住宅用地」を確保・供給しようとするものである(三野町ホームページ ([http://www.awamino.jp/kurashi\\_sumai\\_main.html](http://www.awamino.jp/kurashi_sumai_main.html))<sup>2)</sup>による。「三野町若者定住促進住宅用地供給事業要綱」第1条にほぼ同文の規定が記されている)。1993年度の第1期に始まり現在(2001~2002年度)は第4期の実施中である。各期に開発された「ふるさと団地」は表1の通りである(所在は図2を参照)。

表1 三野町の若者定住地供給事業

期	事業年度	地区	区画数	価格(円/m <sup>2</sup> )
1	1993	加茂野宮	20	平均16000
2	1994~1995	芝生	17	最高で20000
3	1997	清水	27	平均15000~16000
4	2001~2002	花園 太刀野	7 4	17500~19000
			計	75

花園のうち3区画、太刀野のうち1区画が未売  
 三野町総務課からの聞き取りによる

\*1 鳴門教育大学 \*2 鳴門教育大学・院

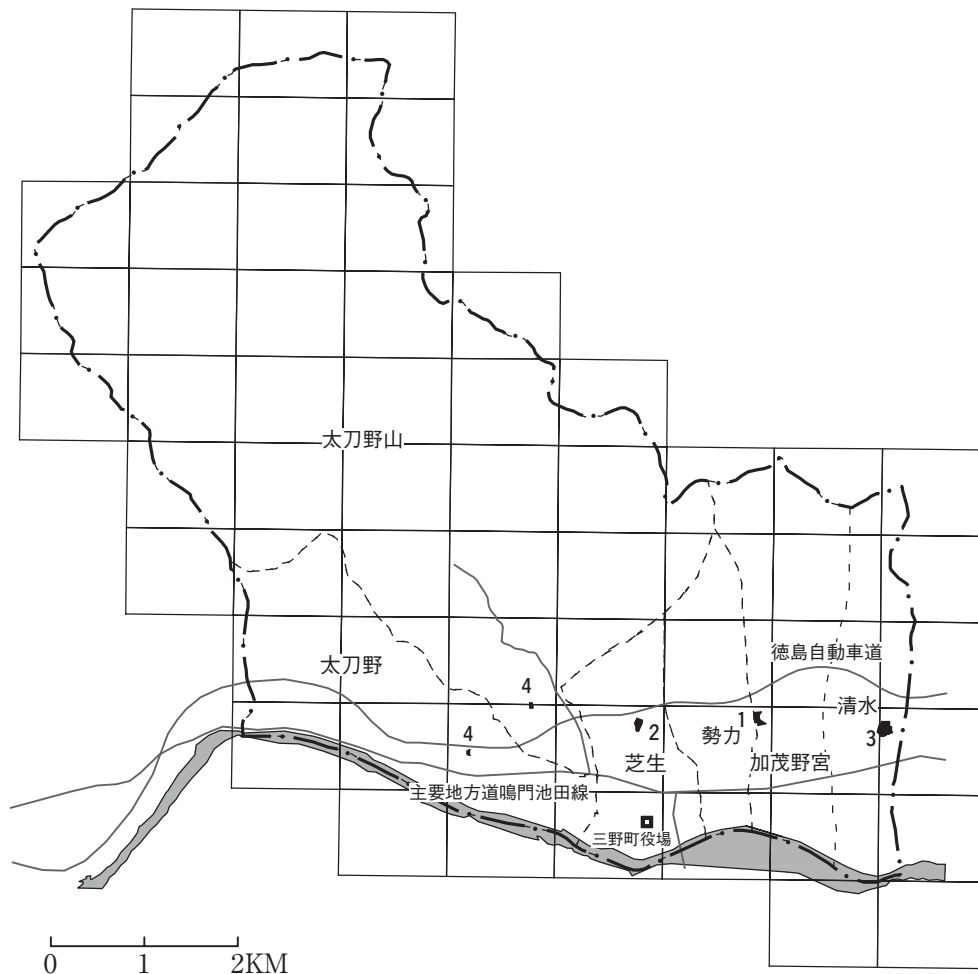


図2 対象地域の概観

数字は「ふるさと団地」の期を示す。  
地図にかかっている方眼は約1km四方の標準メッシュ。

第1期の加茂野宮の団地は滝谷川扇状地の扇端近く、既存の<sup>おうじ</sup>王地集落のすぐ北側に造成された。団地の北・西には幾つかの大工場が立地する。団地周辺や、王地の南約1kmを走る鳴門池田線と王地との間の宅地化が進みつつあるために、団地を景観的に周囲から識別することはできない。団地周辺における民間の宅地開発については、本事業が呼び水になったとも考えられるという（町総務課）。第3期の<sup>しみず</sup>清水の団地も、高瀬谷川の扇状地末端付近、既存の清水集落のすぐ北東に造られている。周囲は王地ほどには宅地開発が進められていない。このため、農村の趣を留めている清水集落とは、宅地として連続してはいるものの、景観的にはやや断絶している。これに対して<sup>しばう</sup>芝生の<sup>あさん</sup>団地は、阿讃山地末端の山陵を削って造成されたものである。地籍は芝生のうちでは

あるが、既存の集落からは、距離にして数百m、比高20~30mほど離れた、山中にある。第4期の花園団地は、河内谷川の右岸段丘にある。第3期までの団地に比べて小規模なことで、既存の花園集落の家屋がさほど密集していないために、集落のなかに造られている観がある。一方太刀野団地は阿讃山地の南麓斜面に造成されたもので、既存の中条・西ノ久保集落の中間にある。位置としては両集落に連続しているが、周囲の宅地化が進んでいないため、既存集落からはやや断絶しているように見える（ただし太刀野団地ではまだ全く家が建てられていない）。

供給される宅地は1区画100坪程度で、これは町内で分家する人たちが適当だと感ずる広さを勘案した結果である。開発用地は町有地ではなく民有地を買い上げて造成している。用地の取得に当たって

は、造成費用を勘案しながら、ある程度まとまった面積が確保できたところから着手してきた。今後は町の財政をにらみながら継続を検討していく予定である。用地の取得に関しても、造成後の団地に関しても、これまでは大きな問題はなく、まだ団地のない地区で開発を要望している地区もある。造成工事は町内企業に発注しているが、測量については大手コンサルタントに任せている。住宅の建設業者に関して購入者に制約を課してはいない。

各期とも事業後に「三野町若者定住促進住宅用地供給事業協議会」<sup>3)</sup>において成果を検討し、応募資格なども見直してきた。その結果、応募資格は次第に緩和されてきた。第4期ではおおむね以下の通りである（町ホームページ）。

1. 本町誘致企業雇用者で、本町に定住を希望する他町村在住者
  2. 本町在住者で定住を希望する者（本町に持ち家のある世帯の承継者を除く）
  3. 県内在住者で本町に定住を希望する者（本町出身者は他県在住でも可）
  4. 原則として年齢が40歳以下で、自らの居住する専用住宅を建築するための宅地を必要とする者
  5. その他、若者定住促進住宅用地供給事業協議会にはかり、町長が特に必要と認めた者
- 購入者には、用地取得後1年以内に自己所有となるべき住宅の建築に着工し、2年以内に完成して自ら入居することが義務づけられている。

第4期には、期日までに応募した者について資格審査を行い、適格者が多数のときは抽選により購入者を決定することになっていた<sup>4)</sup>。しかし以前は純粹な抽選ではなく、仕事の内容も含め「安定」している応募者を優先して選定していた。現在は応募資格第4号・第5号によって最終的にはいかなる人でも適格者となりうるが、当初は本事業に関する広報活動が三好郡・美馬郡に限られていた<sup>5)</sup>ことも併せて考えると、本事業は大都市圏から無限定に住民を募ろうとする性質のものではなく、むしろ町民の流出を防いだり、流出した町民を還流させることを一義的な目的としていたように思われる。

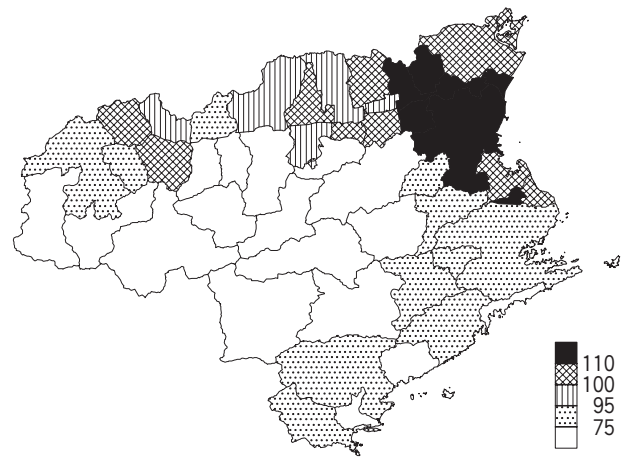


図3 2000年の市町村別人口（1975年を100とする）資料：国調

### 3. 三野町の人口・産業の現況

#### 1) 人口

高度経済成長終焉後、日本の人口移動は県間移動のレベルでは沈静化したが生、県内のような局地的なレベルで顕著になり、過疎問題はさらに先鋭化した。徳島県の場合、徳島市とその周辺地区と対極的な形で、四国山地内とその周辺部とで著しい人口減少が生じた（図3）。そうしたなかで、三野町は2000年現在の人口が5216人で1975年（5301人）とほぼ同数であり、三好・三加茂両町ほどではないが、三好郡・美馬郡のなかで少数の部類に属する。ただし三好・三加茂両町では1975年以降ほぼ一貫して人口が増加してきたのに対して、三野町は1990年まで減少し続け（1975年の人口に対して5%減に過ぎないが）、その後上昇に転じた点が異なっている。総人口のこのような変動の特徴は老年人口（65歳以上人口）の比率にも現れている。すなわち、この15年間に老年人口率は18%（1985年）から28%（2000年）に上昇したが、郡部のなかでは比較的低い値であり、かつ1990年代前半に比べれば1990年代後半の上昇は多少とも緩やかになっている。

三野町では徳島自動車道が阿讃山地の南麓を通っているため、それより北を山間部、南を平野部と見なすことができる。山間部はほぼ大字太刀野山にあたり、平野部には東から西に清水・加茂野宮・勢力・芝生・太刀野の大字が並ぶ。大字単位の人口は1996年以降の値しか利用できないためそれによって町内での人口動態を明らかにすることは難しいが、次の点を指摘することができる（図4）：①面積と

しては町域の6割以上を占める太刀野山の人口はこの6年間に5%減少した(図には示していないが、この結果太刀野山の町全体の人口の1/6に過ぎなくなった)こと、②人口が増加しているのは加茂野宮・清水で、前者は1997年に、後者は1999年に比較的急増した、③町内最大の大字である芝生はごく僅かながら減少しつつあること。④加茂野宮・清水における人口増加は「ふるさと団地」の分譲と時期を同じくしている。若者定住事業の効果であるか否かはともかく、この地区における青・壮年層の比率は比較的高い(図5)。

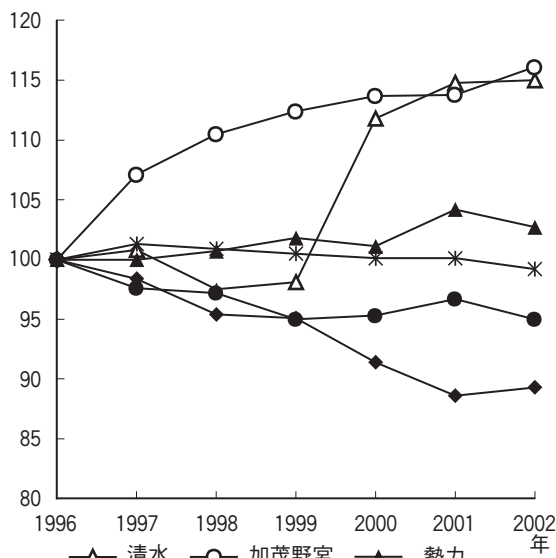


図4 大字別人口の推移 (1996年を100とする) 資料:三野町

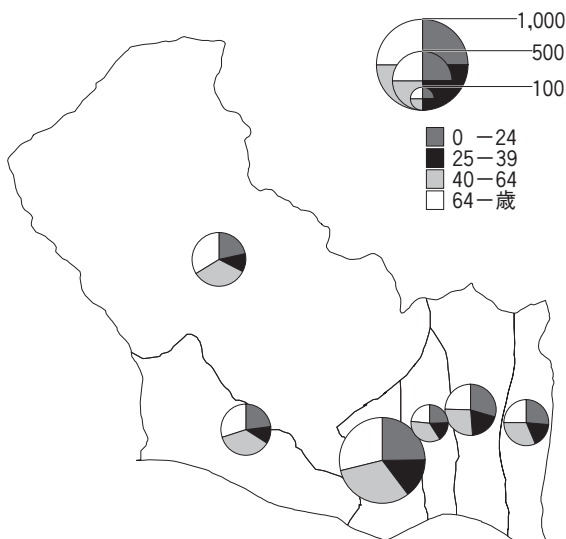


図5 大字別の年齢階層別人口 (2000年) 資料:国勢調査

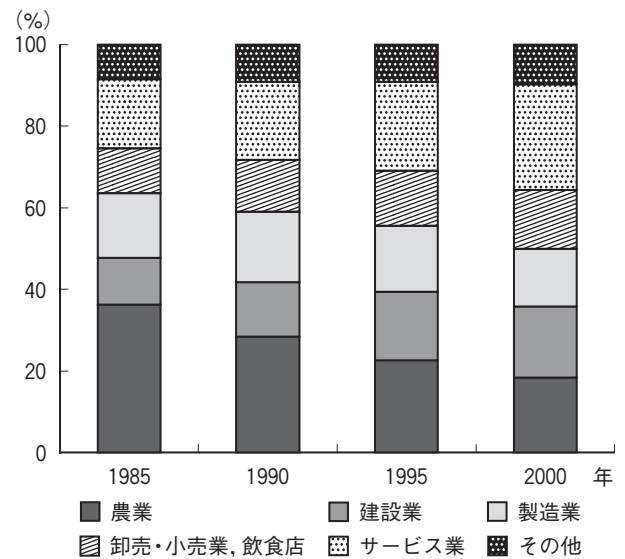


図6 産業別就業者(比率)の変化 資料:国調

## 2) 産業

三野町に居住する就業者(2000年現在、2,490人)の主な産業は、農業・建設業・製造業・商業(卸売り・小売業、飲食店)・サービス業の5つである(図6)。このうち、1985年には全体の36%を占めていた農業就業者は次第に減少し、2000年現在ではその半ばの18%に過ぎない(とはいえ、三好郡内の他の町村と比べると三野町ではまだ農業従事者の比率が相対的に高い)。1990年に17%となった製造業も長期不況下14%に落ち込んでいる。サービス業・建設業・商業(卸売・小売・飲食店業)従事者はこの15年間に一貫して増加した。特にサービス業従事者は17%から26%へと大幅に増えている。

### ①農業

農業就業者の減少は農家数の減少でもある。農家は1980年から2002年までに半減した(828→403、ただし1990年に農業センサスにおける農家の規定が変更された影響も小さくない)。この間、第一種兼業農家は実数においても比率においても激減した。それに対して専業農家・第二種兼業農家はその比率が急増した。これは表面的には両極化の進展に見えるが、専業農家の増加は、廃業・転出した農家の耕地を吸収するなどして経営基盤が安定したためではない(図7)。規模拡大の動きは1980年代には多少とも見られたが、1990年代には急速に規模が縮小し、2000年現在では経営耕地0.5ha未満の農家が55%を占める。すなわち、長期不況下で兼業機会を喪失し



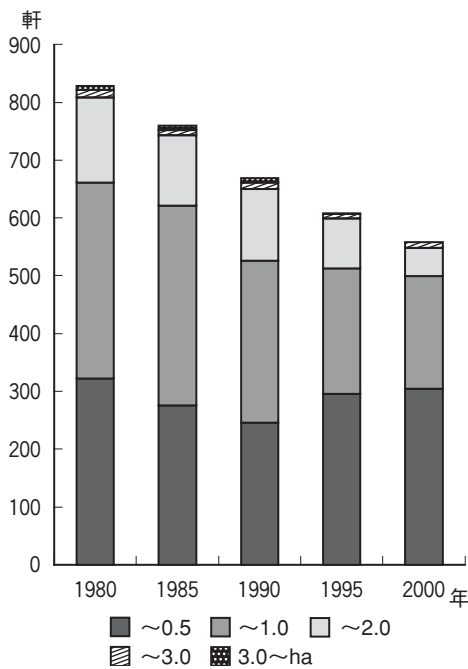


図7 経営耕地規模別農家数 資料：徳島県統計書

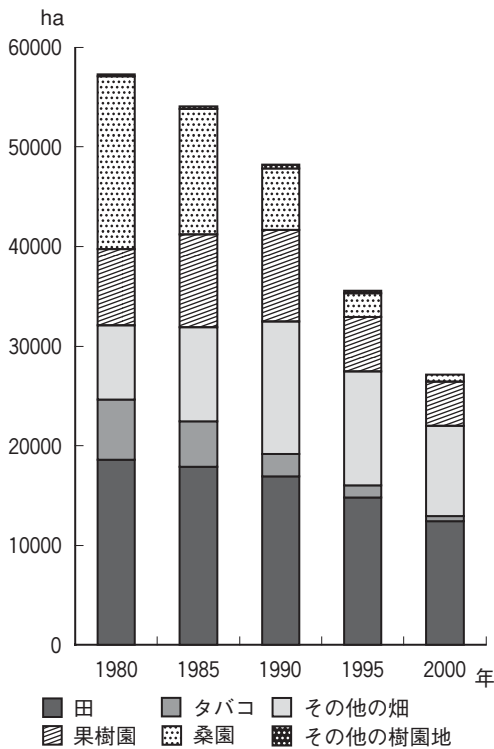


図8 種類別の農地面積 資料：徳島県統計書

た兼業農家（特に第一種）が専業に追い込まれていると見るべきであろう。

経営耕地が減少したことにより耕地の種類も変化した（図8）。三野町は阿讃山地南麓の農業地帯の一部として、かつて養蚕とタバコとを主産物としていた（井上、1990）。1980年から2000年の間に農地が半減するとともに、桑園は事実上消滅し、タバコ



図9 工業(事業所数・従業員数)の推移 資料：徳島県統計書

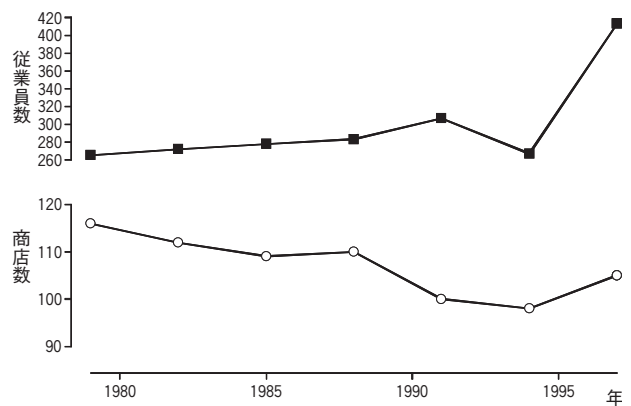


図10 小売業の商店数・従業員数の推移 資料：徳島県統計書

畑も1割程度に減少した。1970年代末から拡大した果樹栽培も、おそらくは農業従事者の高齢化に伴い、縮小している。このため、放棄された耕地が増加しつつあり、太刀野の「ふるさと団地」もこうした土地を利用しているという（三野町総務課における聞き取り）。

### ②工業

製造業はこの20年間に事業所数・従業員数ともに3度の増減を繰り返している（図9）。2000年現在、特に従業者規模では1990年頃と大差ない（1事業所あたり従業者は30人で、三好郡内他町村と比べて規模が大きい）。

### ③商業

1979年には146の店舗（卸売8・小売116・飲食店22）が町内に存在した。その後の推移は単純ではない。小売業（図10）では、店舗数は漸減傾向にあるが、従業員数ではむしろ増加傾向にある。したがって1店舗あたりの従業員数は2.3人から3.9人に増加した。しかし店舗のほとんどは小規模であり、業種

的にも低次財の店舗である。中次の財はもとより日用品の購入でも三加茂町に流出することが多いのではなかろうか（長尾（2001）によれば、高次財に関して三野町は川之江・伊予三島の商圈に含まれる）。また町内の店舗の分布も大きく変化した。すなわち1981年の主要地方道鳴門池田線開通後、これに沿って開設される商店が増える一方で、幅員狭隘な旧県道に沿った芝生の商店街は次第に閉鎖される店舗が増えている。商業重心（のみならず業務一般の重心）が次第に鳴門池田線に移りつつある（図11）。

④就業地

総人口とは違って、三野町内に居住する就業者数は1980年以降も減少し続け、2000年には1980年の1割減となっている。町内で就業している者の比率はさらに減少が著しく、1980年の79%に対して2000年には61%となっている（1970年以降ほぼ10年に10ポイントずつ低下している）。農業従事者が急減したことがこの変動の一因であろう。町外の主な就業地は三加茂町と池田町とで、いずれも1980年には5%足らずであったが、現在ではそれぞれ1割弱の就業者を吸収している。

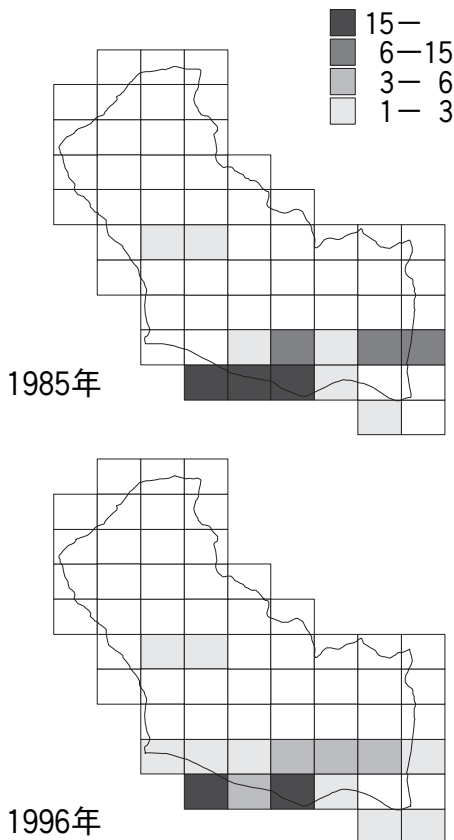


図11 小売業の分布 資料：国土数値情報

4. 「ふるさと団地」への応募者・入居者

1) 応募者の属性

各期の応募者97人の属性を表2にまとめた<sup>6)</sup>。第

表2 「ふるさと団地」の応募者

	受付け年度	応募数	平均年齢	平均世帯員数
1	加茂野宮 1994	33	29.9	3.4
2	芝生 1996	25	30.6	3.6
3	清水 1998-1999	30	32.4	3.8
4	花園 2002	3	39.0	4.0
	太刀野 2002	6	33.8	3.7

表3 応募者の年齢と世帯員数

加茂野宮	世帯員数						計
	1	2	3	4	5	6	
年 -24	1	2	1	1			5
年 25-		3	3	3	1		10
年 30-		1	3	3	3		10
年 35-			4	1	2		7
年 40-					1		1
計	1	6	11	8	7	0	33
芝生	世帯員数						計
	1	2	3	4	5	6	
年 -24		2					2
年 25-		2	4	3	1		10
年 30-			3	1	3		7
年 35-			2	1	1	1	5
年 40-				1			1
計	0	4	9	6	5	1	25
清水	世帯員数						計
	1	2	3	4	5	6	
年 -24	1		1				2
年 25-		3	3	3	2		11
年 30-			1	2	1		4
年 35-		1			6	1	8
年 40-			1	4			5
計	1	4	6	9	9	1	30
花園・太刀野	世帯員数						計
	1	2	3	4	5	6	
年 -24				1			1
年 25-					1		0
年 30-				1	1		2
年 35-		1		3			4
年 40-			1	1			2
計	0	1	1	6	1	0	9
全期	世帯員数						計
	1	2	3	4	5	6	
年 -24	2	4	2	2			10
年 25-		8	10	9	4		31
年 30-		1	7	7	8		23
年 35-		2	6	5	9	2	24
年 40-			2	6	1		9
計	2	15	27	29	22	2	97

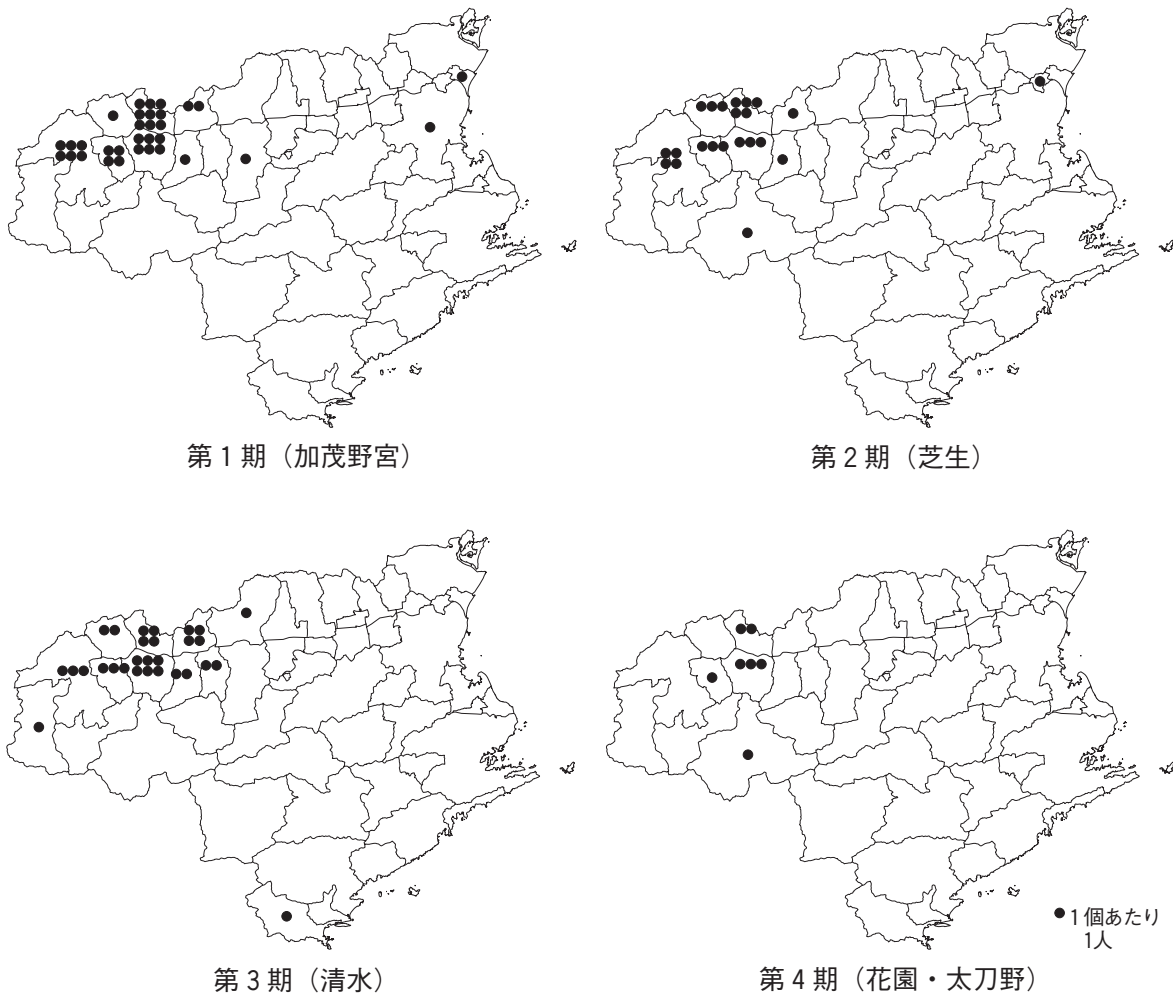


図12 「ふるさと団地」応募者の居住地 県内居住者のみを示した。 資料：三野町総務課

4期は従来よりも提供区画がさらに少ない上にまだ募集が完了していないが、後になるにつれて応募者の平均年齢が上がり平均世帯規模も大きくなっている。これはおそらく、次第に募集条件が緩和されたためであろう。また「若者定住事業」という名称が当初は30代後半以上の年齢の人々が応募するのに抵抗を感じさせるものであったのかもしれない。しかし5歳階級区分で応募者の分布を見る(表3)と、25~29歳階級が全体の32%を占めているだけでなく、各期ともこの年齢層が最頻値となっている。その点では、本事業は確かに青年層に対して訴求力を持っていたと考えることができる。一方、世帯員数と年齢との関係を見ると、概して年齢が上がるほど世帯規模は大きくなっている(特に第1期・第2期にはこの傾向が顕著である)。しかし最頻年代である25~29歳階級の世帯規模は1~3期とも2人から5人までと幅がある。三世代居住が少なくないので

あろう。しかし後述するように、それに該当する人々は必ずしも町内の居住者ではない。

応募者を居住地別に見ると、最も遠いのは神奈川県居住者で、これを含めて7名の県外応募者があった(香川県・兵庫県・京都府各1、大阪府3)。ただしこのうち1名は勤務地が池田町であり、逆に県内居住者のうち5名の勤務地が県外(伊予三島市2、兵庫県1、大阪府2)であった(この人々の生活の本拠がいずれであるのかを判断することはできないので、ここでは居住地によって集計した)。いずれにしても県外からの応募は1割程度でしかない。時期による違いもほとんどない。県内からの応募(図12)は、県東部・南部からの応募もあるが合計で4名しかおらず、事実上三好・美馬両郡からの応募であった。広報範囲に相応していると言えよう。応募者が最も多かったのは地元の三野町20人で、三加茂町18人がこれに次いでいる。他に10人以上応募した

表4 応募者の居住地と通勤先（三好・美馬郡内）

		従業地												その他とも計	
		東祖谷山	山城	池田	井川	三好	三加茂	三野	美馬	脇	半田	貞光	穴吹		
居住地	東祖谷山	1					1								2
	山城			1											1
	池田			8		3									13
	井川			2		3	4								11
	三好					3	1	1		1					6
	三加茂		1	5		1	7		1	2	1				18
	三野			4			6	5	1	3					20
	美馬			3	1		1		1						7
	脇			1											1
	半田							2			2				4
	貞光														2
	穴吹						1								1
	その他とも計	1	1	25	1	10	21	8	3	7	3	0	0		97

のは池田町・井川町で、この4町からの応募者で全体の64%を占める。居住地として三野町を選好するに当たって、距離と方向性（徳島へ向かう）とが強く作用しているように思われる（ただし三好町からは4期あわせて6名の応募しかなく、例外的である）。

表4は、応募者の居住地と従業地とによって書いた居住地—従業地行列である。対角要素は自町村内での就業であり、その右上側がおおむね吉野川の上流から下流方向への通勤を示し、左下側は下流から上流への通勤を示す。さらに表中に太枠で示したのは三野町を「通過」する通勤流である。この表から、

三野町よりも下流の美馬郡の各町から応募した人のほとんどが、三野町もしくはそれより上流の町に通勤していることがわかる。すなわち、三野町をある程度日常的に知っている人たちであり、そうした事情が徳島へという方向とは逆方向の選好を支えていたのではなかろうか。なお、三野町内に勤務している他市町村の住民の応募は第1期で1人、第3期で2人あったのみである。すなわち、応募資格の第1号の該当者はほとんど応募しなかったらしい。ちなみに、三野町在住者のうち三野町内で従業している者も5人しかおらず、誰が入居しても「ふるさと団地」はベッドタウン的な様相を呈することになる。

居住地と応募時期との関係では、まず、三野町からの応募は半数が第1期になされている事がわかる。町内の需要が第1期のみで充足されたわけではなかろうが、自町内のことだけに潜在的な希望者により早く情報が届いたために反応が早かったということであろうか。それと表裏をなして、三好・美馬両郡からの応募は後になるにつれて次第に遠隔地からの応募が増えるように見える。ただし池田町からの応募が次第に少なくなっているのは、やがて池田町でも定住事業が始まるからであろうか。

居住地と年齢との関係（表5）をみると、応募者の多い三野町・池田町・井川町は各年齢層から同数の応募があった（三加茂町は若年層がやや多い）。特に40歳代の応募はこの3町からに限られている。逆に応募の少ない市町からは、25～29歳階級および35～39歳階級の応募が多い。事業の内部事情が見え

表5 居住地別の応募者の年齢

		団地					計
		加茂野宮	芝生	清水	花園	太刀野	
居住地	東祖谷山村		1		1		2
	山城町			1			1
	池田町	6	4	3			13
	井川町	4	3	3		1	11
	三好町	1	3	2			6
	三加茂町	6	3	6		3	18
	三野町	9	5	4		2	20
	美馬町	2	1	4			7
	脇町			1			1
	半田町	1	1	2			4
	貞光町			2			2
	穴吹町	1					1
	徳島市	1					1
	北島町		1				1
	松茂町	1					1
	穴喰町			1			1
	高松市				1		1
	兵庫県		1				1
	大阪市		1	1			2
	大阪府	1					1
京都市		1				1	
神奈川県				1		1	
計	33	25	30	3	6	97	



表6 回答者の年齢構成

	加茂野宮	芝生	清水	計
-24	0	0	0	0
25-	0	0	1	1
30-	3	3	4	10
35-	2	5	3	10
40-	4	3	4	11
45-	2	0	2	4
50-	0	1	0	1
計	11	12	14	10

にくい遠隔地からは、「若者定住」というラベルに最も適した年齢層か、あるいは応募できる限界に近い年齢層のみが反応したのであろうか。時期別に見て三野町の応募者は次第に年齢が高く、世帯規模も大きくなっている（世帯員数の表は割愛する）。他方、池田町からの応募者は第1期には比較的高年齢層が多い。これらの現象の意味は明らかではない。

## 2) 入居者に対するアンケート調査

第4期2地区の土地はすでにあらかた販売が終わっているが、まだ住宅はできていない。そこで第1期から第3期までの団地でアンケート調査を行い、世帯主の年齢・勤務地・世帯構成、前住地・住宅の種類、本事業について知った時期や媒体、購入の動機、団地の良いところや問題点、などを訊ねた。調査は2002年8月初旬に面接法で行った（一部の留守宅には留め置きで回答を郵送願った）。回答数は加茂野宮11、芝生12、清水14、でいずれの団地でもおむね半数の住民から回答いただいたことになる。

回答者の年齢（表6）から購入時の年齢を計算すると、応募者全体と同じように、後の時期の購入者ほど年齢層が高くなっていることがわかる。世帯構成には、大差はないものの、加茂野宮にはなかった3世代世帯が、芝生には1世帯、清水には2世帯あった。各団地の購入者ともそれぞれの期にのみ応募している（ただし芝生の購入者の1人は第1期には期限に間に合わなかったため第2期に応募したとしている）。

いずれの団地でも回答者のほとんどは前住地は町外であった（町内に前住していたのは加茂野宮で3軒、芝生・清水で各2軒）が、本事業について情報を得た媒体は時期によって違っている（表7）。すなわち第1期では広報や徳島新聞よりも、親類（親を含む）・知人を挙げる回答が最も多かった。本事

表7 この事業について知った媒体

	加茂野宮	芝生	清水	計
広報	2	4		6
新聞	4	5	2	11
口コミ	4	3	11	18
不特定			1	1
その他	1	1		2

表8 購入の動機

	加茂野宮	芝生	清水	計
土地が安い	5	9	7	21
一戸建てがほしい	6	7	7	20
三野に帰る	1		1	2
田舎に住みたい		1		1
近所関係がよさそう		2		2
その他	1		1	2

複数回答があるので逐語との合計は回答者の数と一致しない。

業について知った時期も1992年とする回答が少なくとも3軒あることからしても、正規の広報開始前から情報が流布していた様子が窺える。第2期は第1期の翌年度に実施されたこともあり、本事業はかなり広く知られていたらしい。芝生の回答者のうち5人は1994年以前に本事業について知っていたと答えている。新聞や広報の値が高いのは、事業自体というよりも第2期の説明会など具体的な情報の源としてであろう。第3期には口コミ（「噂」も含む）の比率が圧倒的に高い（ただし、その11人のうち3人は、親などから新聞記事を見せられた、という回答であり、その意味では新聞の効果も無視できない）。第1期から3年を経過しその評価が口コミでなされる時期になったのであろう。

購入の動機（表8）は単一ではなからうし、またそれらは相互に関連しあってもいるものもある。いずれの団地でも、土地が広く安いことと一戸建ての住宅が欲しかったことがほとんどの回答者から挙げられた。三野町へ（あるいは両親の近くへ）戻るため、また田舎に対する憧れといった、都市部からの還流を示す回答は例外的である。もとより、土地が安くて一戸建ての住宅が建てられるという理由も、都市部からの還流を動機づけるものである（実際、ある回答者は徳島市内で住宅を求めていたがそれを止めてここに購入したと述べている）。しかし、購入・入居に当たって就業地や勤務先を変えたという回答は、加茂野宮で2、芝生で3、清水で0であり、ほとんどの購入者は生活基盤を変えずに済む小

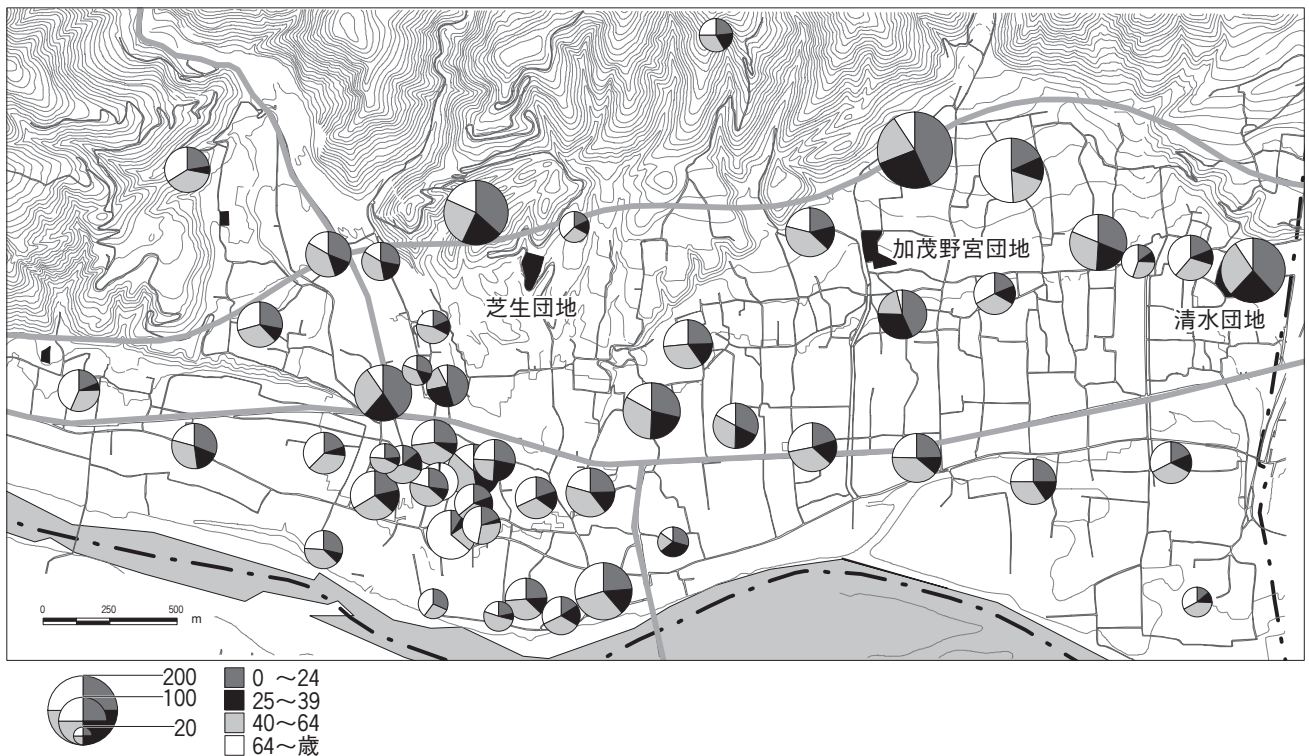


図13 国勢調査基本単位区別の年齢階層別人口分布（2000年） 資料：国調

規模な移転先としてこれらの団地を選んだということになる。

居住する団地についての評価では、同世代の人間によって新しく造られたコミュニティである点が最も多く評価されている（加茂野宮で6、芝生・清水で各5。それを購入の動機としている回答者も芝生に2軒あった）。実際、周囲の旧集落とは住民の年齢構成が多少とも異なっている（図13）。ただし、このことを、周囲の集落との交渉が少ない、あるいは葬祭にあたって指示できる者がいない、という形

で否定的に評価する意見もあった。それ以外に不都合な点として多くあげられたのは、工場に近接する加茂野宮では工場の騒音・臭気など、芝生・清水では交通の不便さであった（交通問題は、通学との関係ではさらに顕著であり、芝生で5人、清水で3人が挙げている。図14に示したように、加茂野宮・清水の両団地は王地小学校の近傍にあるが、芝生団地から芝生小学校までは直線でも1 km以上、実際には2 km近い通学距離がある。花園団地もそれに類する）。町内に商業施設が少ないことを問題としていたのは比較的少数（芝生で1、清水で3）で、三加茂町・美馬町などで賄えるのでさほど問題にはならないという見解が多かった。団地内に不備な施設としては、子供が遊ぶことのできる大きさ・設備のある公園・遊園地、児童館、集会所、などが挙げられ、それらの建設に加え、街灯の増設やゴミ収集の回数増加などが行政に対する要望として挙げられた。

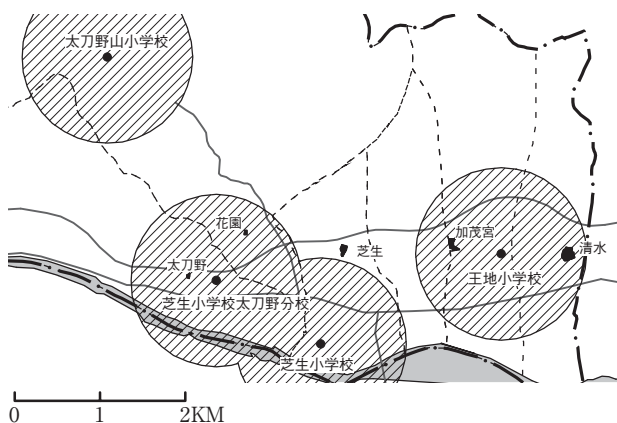


図14 小学校の1 km圏

三野町唯一の中学校である三野中学校は芝生小学校に隣接して建っている。

## 5. 結びにかえて

75区画の「ふるさと団地」によって増加する人口・世帯は町全体の5%不足であり、必ずしも大規模なものではない。しかしそれだけの新住民が一

表9 三野町以外の町における宅地分譲事業の概要

	地区	区画数	平均区画面積 (㎡)	分譲価格 (万円/㎡)	条件
美馬町	芝坂	18	331	1.5	・4年以内の着工 ・「美馬町に永住を希望する概ね50歳未満」の者または「永住見込みの未成年者の親権者」
池田町	ヤマダ	8	230	5.6	・3年以内の着工 ・池田町に永住を希望する50歳未満」の者または「18歳未満の子供がいる世帯」の者
山城町	国政	10	208	1.5	・3年以内の着工 (4年以内の入居) ・町内居住者を連帯保証人とする

カ所に入来することになれば、周囲の旧来の住民と多少とも摩擦が生ずることは避けがたい。三野町が比較的小規模の団地を分散的に造成したことは何らかの計画に基づくよりも偶発的な結果のようであるが、少なくともそれは新旧コミュニティの調和に有効に機能したように見える。三野町の若者定住事業では、基本的には三好・美馬両郡内での移住が生じたのであり、広く徳島県西部における人口減少を防止するという点での効果は現時点では判断しがたい。しかし、全くの部外者ではなく何らかの形で三野町に関わりのある者が入居者になったことは、上記のような新住民を調和的に取り込む点では確かに有利に作用していよう。購入者の心理においても、現住所の近傍に移転先を見つけることは比較的抵抗が少ない。三野町の造成した団地が速やかに購入されたのは、価格のみならず、こうした面もあざかっていただけではなかろうか。

なお、図1に示したように、三野町周辺では美馬町・貞光町・池田町・山城町が若者定住事業として宅地分譲を行っている。三野町の「ふるさと団地」の応募者が広く三好郡・美馬郡に分布していることを考えると、これら他町の宅地分譲事業は三野町の事業と競合するとも言える。ここでその点について検討することはできないが、各町のホームページ<sup>7)</sup>の記載によって、各町の宅地分譲の概略を表9にまとめた。分譲面積・価格は美馬町が三野町とほぼ同じであるのに対し、池田町・山城町は三野町よりも小さく、しかも池田町は価格(単価)が三野町の3倍近い。応募条件はいずれも三野町より緩やかであるが、それだけではこれら後発の分譲事業が三野町よりも優位を確保することは困難であろう。長期不況のためもあるが、これらの町の分譲は必ずしも順調

ではないという<sup>8)</sup>。

[付記] 本稿作成にあたり資料を提供いただいた三野町総務課、アンケートに御協力いただいた各「ふるさと団地」の住民の方々にお礼申し上げます。また、(株)NTT-Neomeit四国には対象地域のMEMAPを提供いただき(図13に示した等高線・道路網にはそのデータを用いている)、図12を描くには谷謙二氏のMANDARAを使わせていただいた。記して感謝申し上げます。(文責 立岡)

#### 注

- 1) 本章における若者定住事業に関する事実的内容は、特に注記しない限り三野町役場からの聴き取りによる。
- 2) 本稿で言及するweb上の記事のURLは、いずれもその記事のページ自体のURLであり、2003年6月6日現在で確認している。
- 3) この協議会は、町長を会長とし、町会議長・総務建設常任委員長・地域開発特別委員長・助役・総務課長を委員とする。事業の実施に関し、町長の諮問に応ずるためのものである(前記「実施要綱」第3条・第4条)。
- 4) 第1期～第3期も同様であろう。ただし第1期・第2期には締切までに募集数を超える応募があったようであるが、第3期以降は募集数に達しなかったため、現在随時申込を受け付け、資格審査を行っている。
- 5) 広報は町の『広報』・徳島新聞を介して行われた。現在はすでに引用したように、町のホームページで応募条件も含めて事業が紹介されている。
- 6) 提供された区画数がさほど多くないため、応募者数も統計的検定に耐えるほどの数に達していない。したがって以下では一般的な傾向を読み取るにとどめる。なお、三野町の旧ホームページ [http://www.planning21.ne.jp/~minocho/syukai/cyousei/teijyuu.html] によれば、1994年「1月、分譲のための説明会を開いたところ、20区画に対し100人が参加し、分譲の条件に該当する町内外の35人が申込みをし」という。「対象となったのは35歳未満の既婚者で、三野町の誘致企業で働く他町村在住の定住希望者や、現在三野町に住み定住を希望する人」で、「予想外の人気で資格審査の末、公開抽選で購入者を決定し」た由である。
- 7) URLは以下の通りである：  
美馬町：[http://www1.sphere.ne.jp/mima/top\\_main/](http://www1.sphere.ne.jp/mima/top_main/)

topix/20020513.html

池田町：[http://www.awaikeda.jp/s\\_bunjyou.htm](http://www.awaikeda.jp/s_bunjyou.htm)

山城町：<http://www.town.yamashiro.tokushima.jp/bunzyou/bunzyou.htm>

- 8) 三野町総務課での聴き取りによる。実際、池田町のホームページによれば、現在の応募資格は緩和されたものであるらしい。

## 文 献

井上 隆 (1990)：吉野川流域における葉たばこ栽培の展開、1989年度鳴門教育大学修士論文（未刊）。

長尾 満 (2001)：消費者購買行動から見た商業地システムの変容—徳島県の事例—、徳島地理学会論文集、4、127～142。